

調査結果の概要

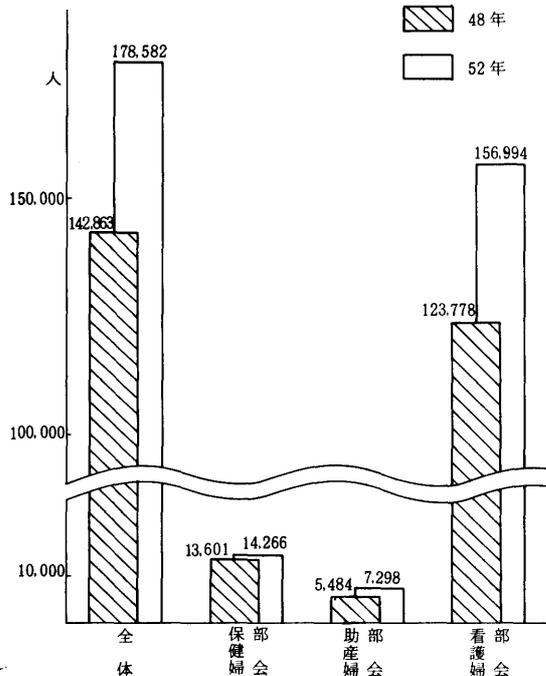
〔第1部〕 属性と勤務状況

I 会員数の推移

調査結果を述べるに先立って、今回調査の母集団となった協会会員数についてふれておきたい。今回の母集団の規模は178,582名（昭和52年7月31日現在）である。48年度に比べると35,719名、25.0%増加している。

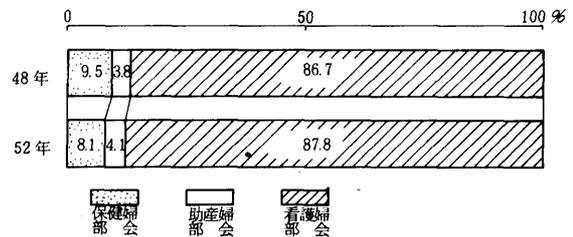
まず部会別では、48年度に比べて「助産婦部会」が33.1%、「看護婦部会」が26.8%、「保健婦部会」が4.9%伸びている〔図I-1〕。部会別の会員構成比は、48年に比べ「保健婦部会」が相対的に小さくなり、「助産婦部会」と「看護婦部会」が伸びた〔図I-2〕。

また全就業看護職に対する会員の業務別組織率



〔図I-1〕部会別会員数の増加

をみると〔表I-1〕のようになった。なおここでは各部会会員ともほぼ9割前後が部会名の業務についているので、部会別人数を、それぞれの業務の就業者数と考えてある。



〔図I-2〕部会別会員構成

〔表I-1〕業務別会員の組織率

	会員数	*全就業看護職数	会員の組織率
全体	178,582人	447,364人	39.9%
保健婦	14,266	16,590	86.0
助産婦	7,298	26,618	27.4
看護婦(士)・准看護婦(士)	156,994	404,156	38.8

* 昭和52年度「厚生省報告例」より

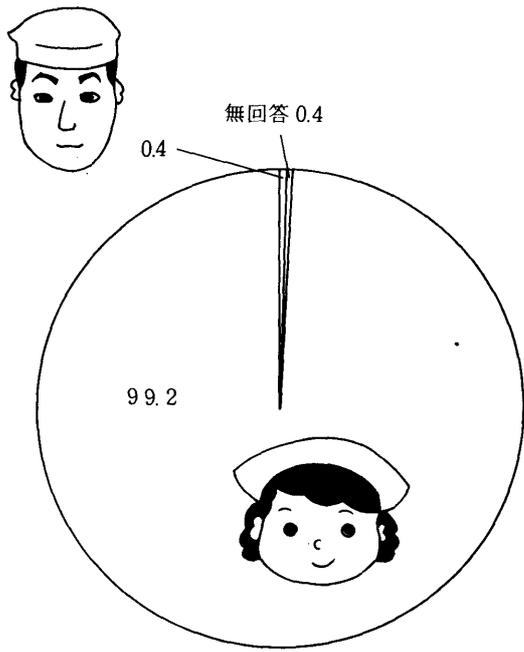
II 会員の属性

1 性別

会員の圧倒的多数は女性であり、男性は0.4%にとどまる〔図II-1〕。

2 年齢

今回の会員全体の平均年齢は35.5歳である。年齢構成比では20~29歳代に会員の40.3%が集中し、以後年齢が高くなるにつれ会員数は減少する〔図II-2〕。



〔図Ⅱ-1〕男女別会員の割合 (単位%)

これを48年度と比較すると、24歳までの若年層に減少がみられるものの、その他の年齢層はおおむね増加している。なかでも48年度の「20~24歳」代の伸びの大きさを受けて、今回の調査では「25

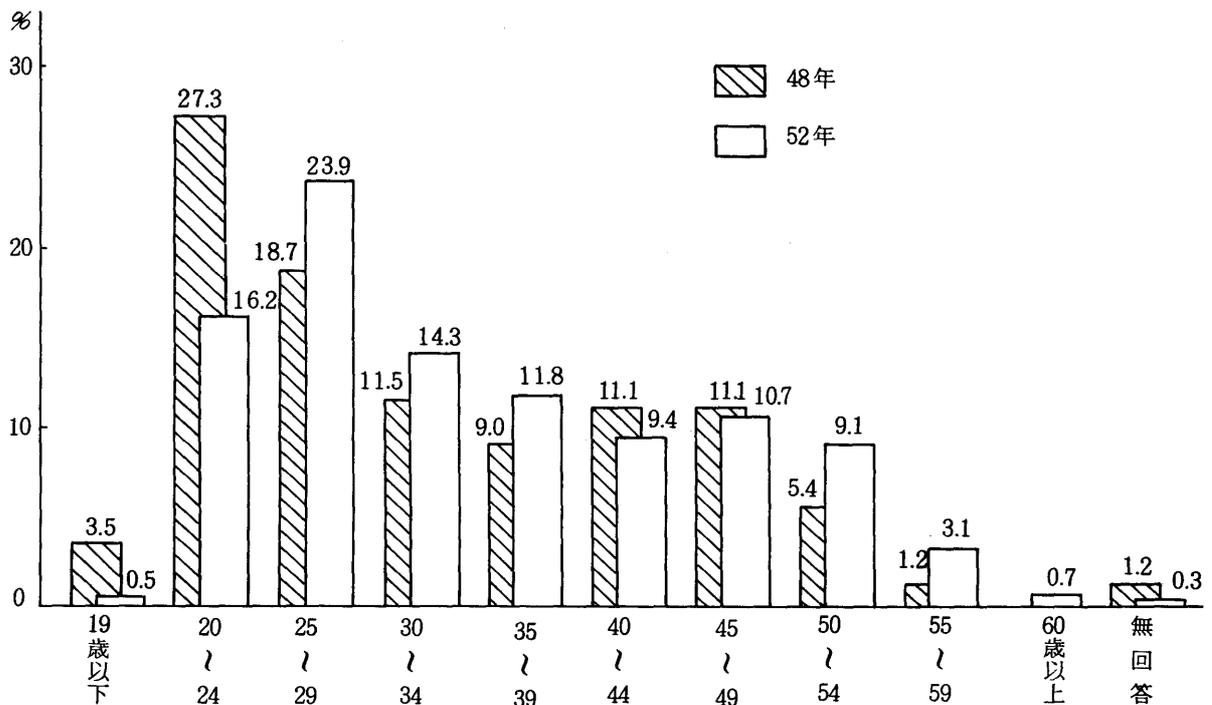
~29歳」台の増加が顕著であった。平均年齢も48年度より3.1歳高くなっている。

業務別でみると、保健婦と助産婦は似たような構成比をなし、「25~29歳」と「50~54歳」とに山をつくり、平均年齢もそれぞれ39.0歳、38.8歳と高い。これに対して准看護婦では半数近くが20歳台に集中し、平均年齢も30.6歳と若かった。看護教育者の平均年齢は37.7歳、看護婦は35.8歳である。なお主な業務別に全就業者と会員との年齢構成を比べると、会員の助産婦は全就業助産婦に比べて若い者が多く、逆に会員の准看護婦では全就業准看護婦に比べてやや年齢の高い者が多い〔図Ⅱ-3〕。

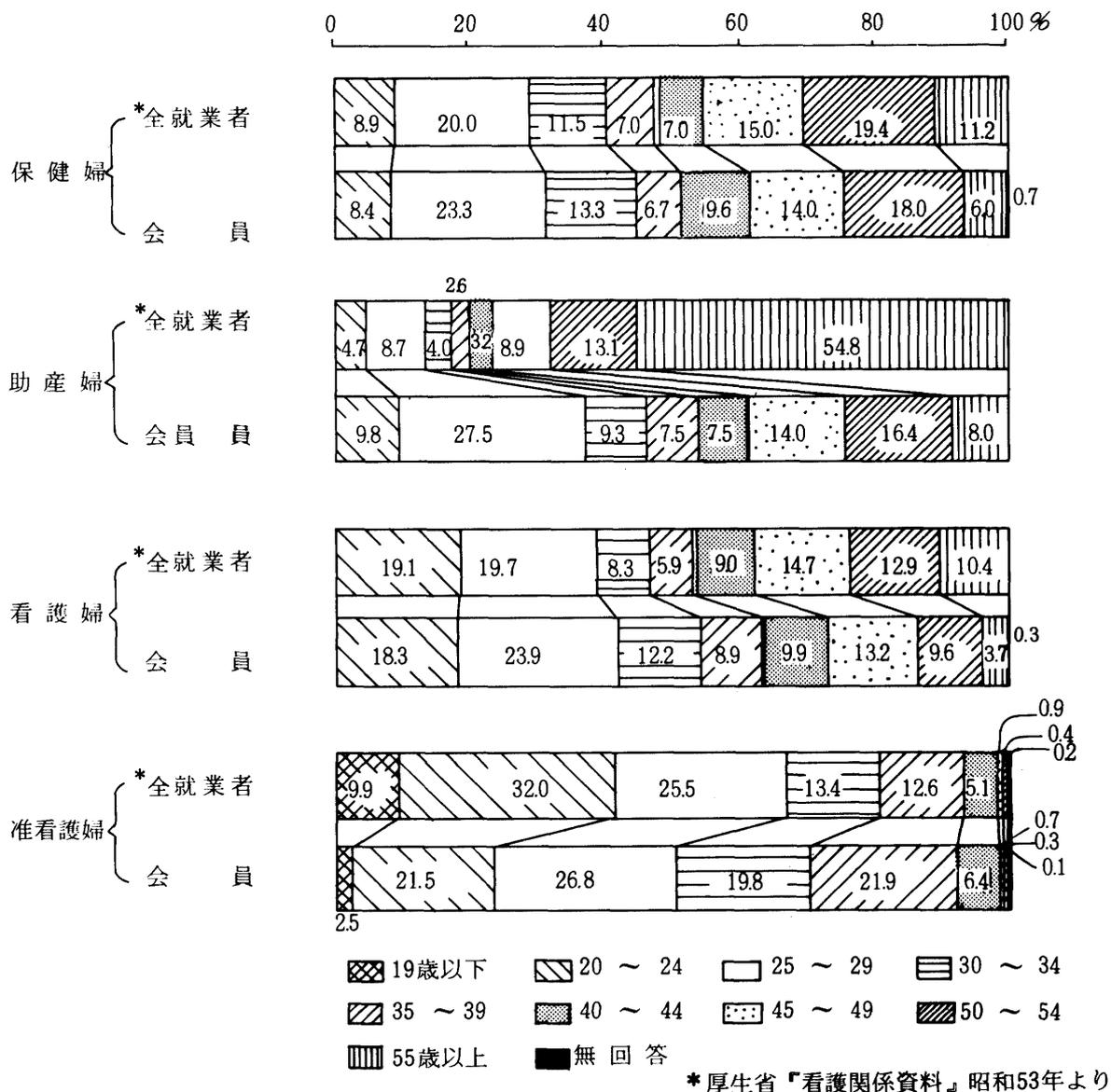
3 最終学歴

1) 一般学歴

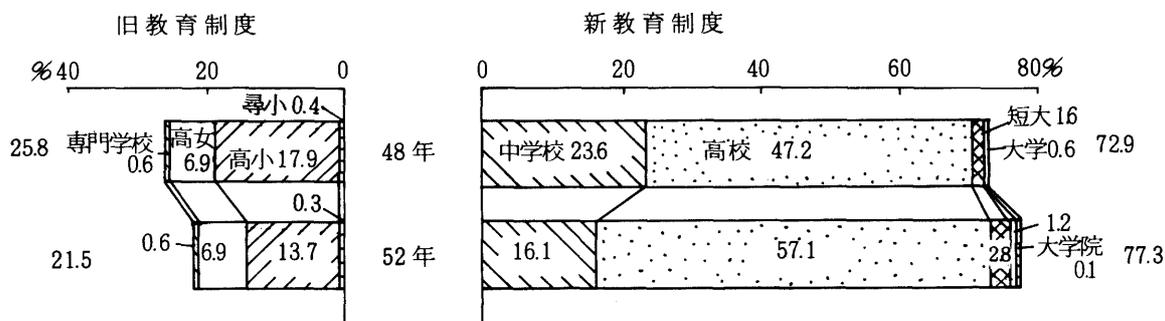
新教育制度出身者77.3%、旧教育制度出身者21.5%である。48年度よりも構成比で4.5%、新教育制度出身者がふえた。新教育制度出身者をみると、中学校卒業者が減り、高校、短大、大学、大学院



〔図Ⅱ-2〕年齢別会員数の推移



〔図Ⅱ-3〕 主な業務別年齢構成



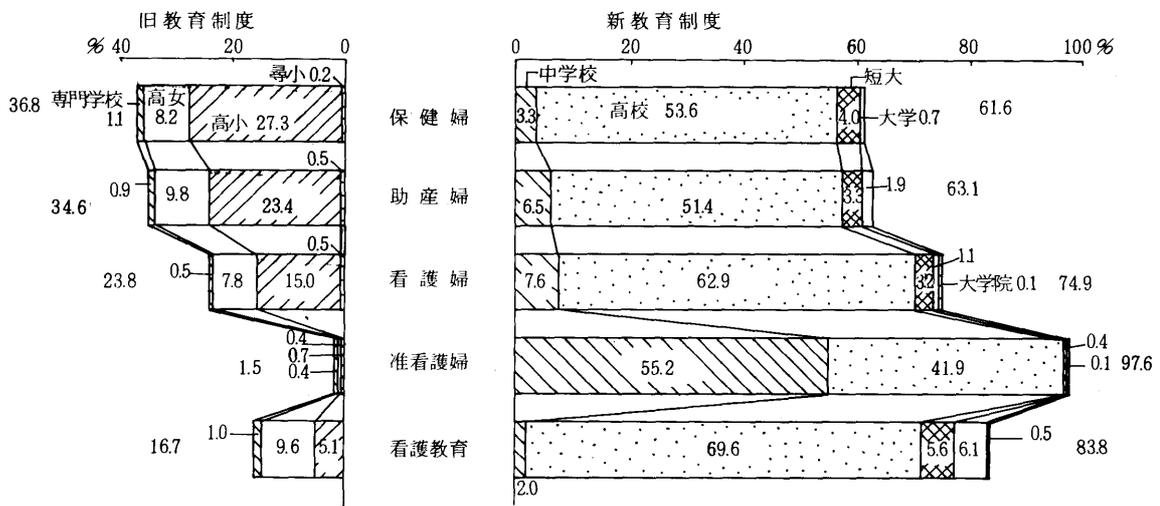
〔図Ⅱ-4〕 会員の一般学歴

出身者がそれぞれ増加している〔図Ⅱ－4〕。

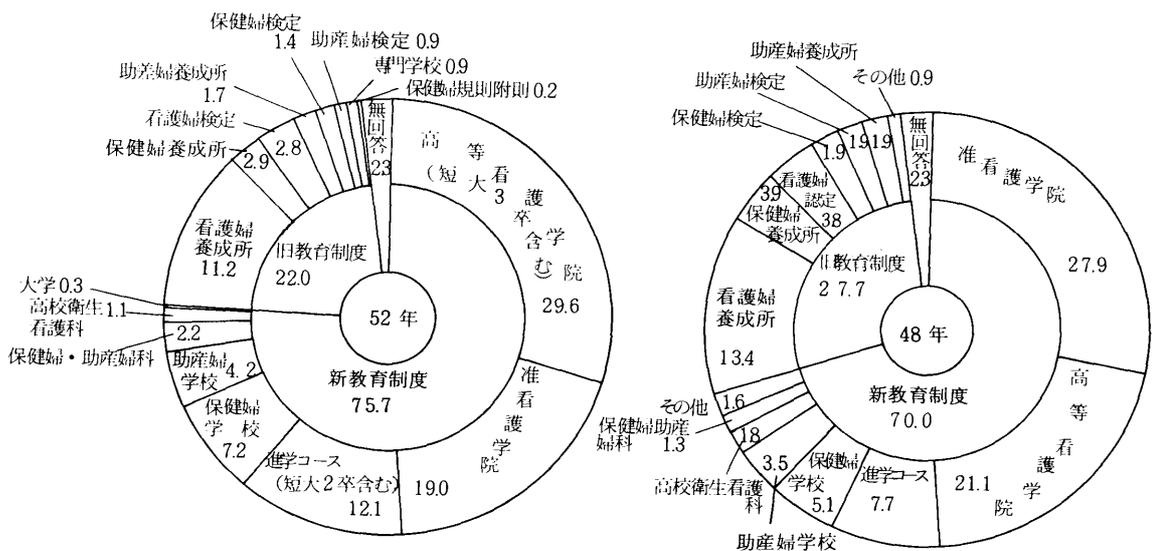
業務別では48年度は、保健婦の半数以上が旧教育制度出身者であったのに対し、52年度では新教育制度出身者が61.6%と逆転した。准看護婦はほぼ全員が新教育制度出身者であるが、内訳では48年度と同様中学校卒業の方が高校卒業より多い。また、看護教育者の83.8%は新教育制度出身者である〔図Ⅱ－5〕。

2) 専門学歴

48年度と同様に「准看護学院」と「高等看護学院」卒業者が合わせて全体の約半数を占める。しかし、その割合は44年よりは48年、48年よりは52年の方が「高等看護学院」卒業者の比率が増え、ことに52年は初めて「准看護学院」卒業者を上回った。また「進学コース」「保健婦学校」「助産婦学校」卒業者も増加し、全体的に会員の教育背景のレベ



〔図Ⅱ－5〕 業務別会員の一般学歴



〔図Ⅱ－6〕 会員の専門学歴 (単位%)

ルアップがうかがわれる〔図Ⅱ－6〕。

業務別では保健婦も助産婦も48年度と対比するとそれぞれ旧教育制度の養成所や検定出身者が相対的に減り、かわって、新教育制度の「保健婦学校」や「助産婦学校」及び「（専門学院）保健婦助産婦科」卒業者が6割以上にまで伸びている。

4 看護職としての通算経験年数

会員の看護職としての平均通算経験年数は10.9年である。通算経験年数のバラつきにそれほど大きな差はない〔図Ⅱ－7〕。しかし48年度に比べると9年以下の者が減り、かわりに10～19年が増加した。また、30年以上が48年度より5.2%伸び、中堅どころのベテラン看護職会員の増加をうかがわせる。職位別では、当然のことながら職位の高いものほど平均通算経験年数は長い〔図Ⅱ－8〕。

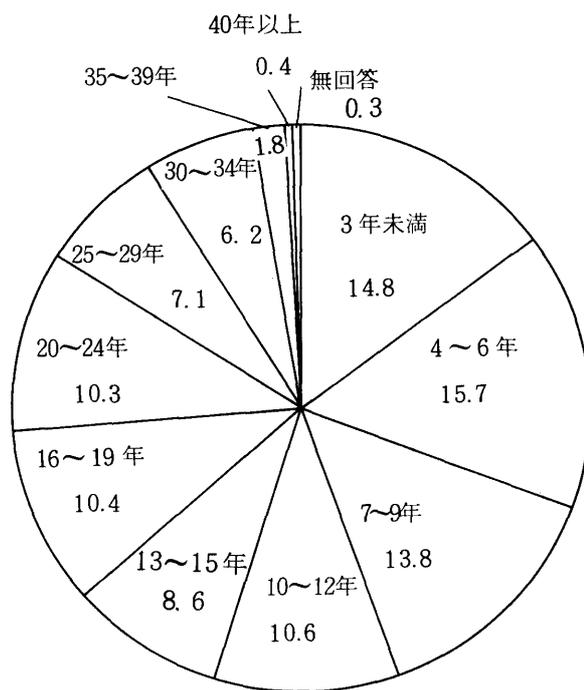
5 勤続年数

現在の職場での会員の平均勤続年数は8.7年である。昭和51年女子労働者の5.6年（労働省婦人少年局『婦人労働の実情』昭和51年）と比べると、3.1年長い。しかし、会員全体では20年以上の者は1割と少なく、3年以下のごく短い者が36.3%を占める。職場への定着率という点からは必ずしもいいとはいえない。

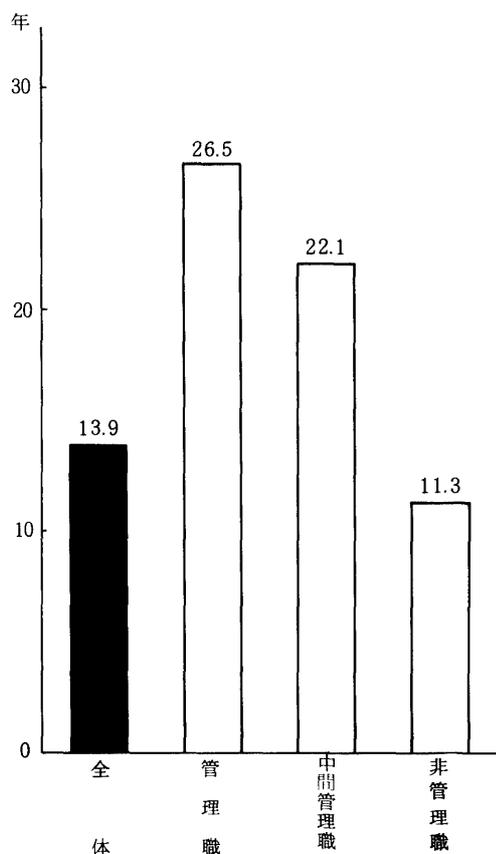
業務別では保健婦の平均勤続年数が11.1年でもっとも長い。次いで看護婦、助産婦、准看護婦、看護教育者の順に続く〔図Ⅱ－9〕。

6 協会の会員としての通算年数

9年以下が全体の54.1%を占めている〔図Ⅱ－10〕。そして会員としての年数が9年以下の者の大半は「非管理職」であった。これを勤務場所別にみると、「病産院」・「診療所」・「事業所」勤務者は過半数が9年以下に集中しているのに対し、「保健所」では9年以下と20年以上とでそれぞれ、4割弱に二分されていた。看護職としての

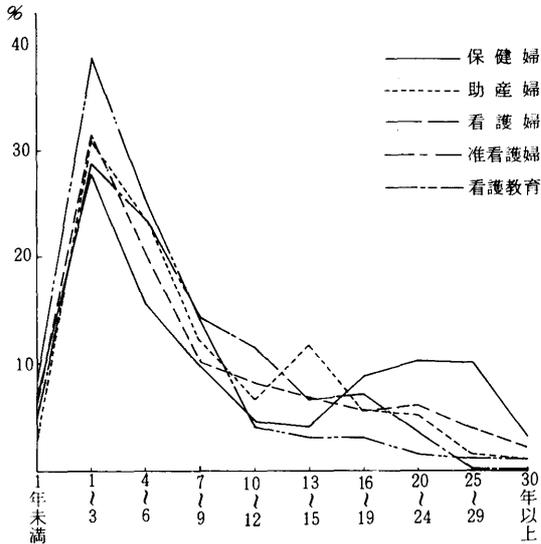


〔図Ⅱ－7〕 看護職としての通算経験年数(単位%)

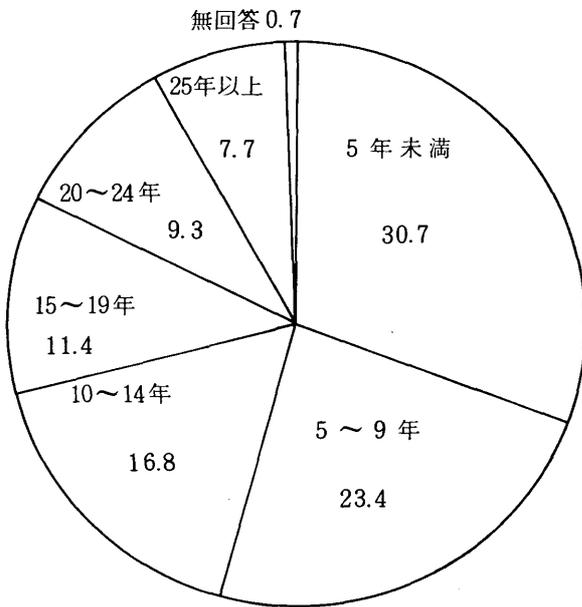


〔図Ⅱ－8〕 職位別平均通算経験年数
通算経験年数と会員としての通算年数とは、両

者の長さがほぼ同じか、会員の通算年数がやや短いというものが大半を占め、就業とほとんど同時に会員になるものが多いようだ。



〔図Ⅱ－９〕業務別勤続年数

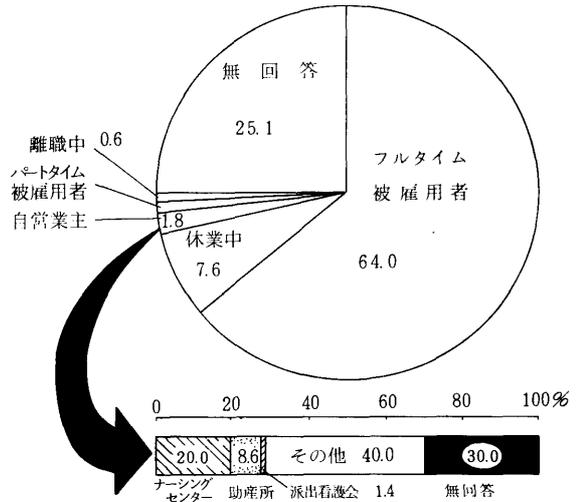


〔図Ⅱ－10〕会員としての通算年数（単位％）

Ⅲ 勤務の現状

1 勤務形態

会員の大半はフルタイム雇用者である。パート



〔図Ⅲ－1〕会員の勤務形態（単位％）

タイム雇用者は0,9％，自営業主は1.8％いる。また，自営業主の会員の施設種類はナーシングセンターが20.0％，助産所が8.6％である。48年度と比べると自営業主の割合は0.6％から3倍に増えたが，内訳では「派出看護会」と「助産所」が激減している〔図Ⅲ－1〕。

なお，これ以降本報告では，現在離職中の者0.6％を除いた会員について取り扱うものとする。ただし休職者に現在の勤務状況を問うている箇所は休業直前の勤務について回答を得た。

2 勤務場所

自営業主を除いた雇用会員の3/4は「病産院」に勤務している。48年度に比べ「その他」が2倍に増えているのは「看護教育機関」勤務者が増えたことによる〔図Ⅲ－2〕。

勤務場所と年齢との関係を見ると「病産院」勤務者は若い層が多く，44.8％は29歳以下である。これに対し「保健所」「市町村」では「25～29歳」と「50～54歳」とに2つのピークをなしている〔図Ⅲ－3〕。

また，ほとんどの勤務場所で会員の7割前後はフルタイムで働いていた。